辱交四十年，浜田公一先生を送る

宮井　敏

浜田公一先生は終戦翌春の昭和二一年同志社大学文学部英文学科（旧制）に入学され，卒業後，暫らく旧制大学院最後の院生として学ばれてのち，同志社大学教養学部助手，つづいて文学部助手を経て，法学部専任講師，助教授，教授として在職され，昨春通算四十年以上に及ぶ同志社生活の幕を降され，請われて神戸芸術工科大学の設立に参加され，今なお教壇にあって大学英語教育に情熱を注がれている。

たまたま筆者は一学年下の下級生として，一年おくれで四十年ばかりみあと慕いて公私共に多大の御指導を賜わった者であるが，一言にして云えば先生は温厚篤実，諄々と説いて倦む事なく，500クラスを超えるほう大な英語科の指導者として長期にわたってその職責を果され，晩年は最長老教授として重きをなされた。

先生の御専門はイギリス十八，十九世紀の小説論であり，長年にわたりあまたの論文を発表されているが，とりわけ，ディッケンズ，ウルフに関する論文は論旨精密にして明快，出色のものとして発表当時話題を呼んだのを記憶している。さきに，「先生は温厚篤実」と，何やら高校の名物校長のような云い方をしたが，お若い頃は仲々の文学青年で，内に蔵した激しい文学への情熱が溢れて，可なりの間創作に打ち込まれた事がある。詩論を専攻して詩を書く人は我々の周囲にも決して稀ではないが，散文に筆を染められる人は寡聞にして聞く事がない。同人誌に発表された創作はその都度拝読させて戴いたが，その作風は意外に鋭く人間の心理の内面を照射して，容赦なく自我をあばいて見せるという所があり再読，三読して思わず引き込まれたもの

である。そして，その実作者としての立場からのイギリス小説の分析は余人を以て替えがたい独自の個性的観点があり，教えられる事たびたびであった事である。

おんまじわりをかたじけのうして四十年，あれを思い，これを思い，想うてこゝに到れば万感胸に迫るものをおぼえるものであるが，幸い先生は新設校神戸芸術工科大学で現職の長老教授として新らしい世界で御活躍である。先生の御健康と御精励を心から祈念するものである。